

「馬鹿者を命ず！」

第三十二回 伊予南フェア始まるその二 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

広岡卓次 (ひろおか・たくじ) 49歳、地域おこし協力隊員として伊予南市に移住し、そのご伊予南プロジェクトの幹部社員となる。

青山麻衣 (あおやま・まい) 24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。

松島秀人 (まつしま・ひでと) 34歳、「パン焼き工房・まつしま」オーナーシェフ。東京で修業し故郷の伊予南市にベーカリーレストランを開く。

堤誠一 (つづみ・せいいち) 71歳、元大阪の大手電機メーカー社員、再婚を決意し「パン焼き工房・まつしま」で披露宴を開く予定。

四分地恒三 (しぶち・こうぞう) 59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。

花咲かえて (はなさき・かえて) 24歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

市

役所脇の駐車場にラパンを停めた悠太は鞆からケータイを出し、新庄の電話番号を押した。

新庄はすぐに電話に出て、悠太が駐車場にきていることを確認し、「今そっちへ行きますから」と言った。

ほどなく新庄がやってきて、そそくさとラパンの助手席に乗り込んだ。

「さあ行きましょうか。役所から離れてください」

「あ、でも……どこへ？」

「どこへでも。石打くんの好きなところへ行つてください」

「そう言われても……」

「それなら山の展望台にでも行ってください。覚えていますか？ ロープウェイがある山の途中ですよ」

悠太は記憶を頼りに国道を南に下って海沿いの山に登り、中腹にある展望台の駐車場に車を停めた。

前回までのあらすじ

榎社長は悠太とシヨーン・次川と「霞庵」で昼食を取りながら、次川に二名島バッテリーで働かないかと誘う。驚く次川は即座に断わる。一方、喜多嶋から悠太に、伊予南フェア準備を終えて来週は東京入りするという電話が来た。

眼下には二名島バッテリーの巨大な本社工場が威容を誇っている。その向こうに広がる海のきらめきは目が痛いほどで、夏が間近に迫っているのを感じさせる。

ここには以前、麻衣と一緒に来たのだった。あれは麻衣が仕事のついでに伊予南市にやってきた時だ。麻衣とは久しぶりに再会して、まるで恋人時代に戻ったみたいいろいろな話をしたっけ……。

「で、亀田ですが、この一週間どうでした？」

新庄が本題を切り出した。

「特に変わったところはありませんでしたけれど」

「本当ですか？」

「本当です。どこからどう見てもずっと普通と言うか、おかしなところはありませんでした」

一週間ほど前に清谷きよたにに滞在していた時、悠太は新庄から「亀田を預かって監視して

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた) 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

新庄誠人 (しんじょう・まこと) 39歳、伊予南市役所・地域振興課長を解雇され、伊予南プロジェクトの幹部社員となる。

亀田太 (かめだ・ふとし) 29歳、伊予南市役所・地域振興課員を解雇され、新庄の部下として伊予南プロジェクトの社員となるが……。

喜多嶋翔 (きたじま・しょう) 25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

名女川直行 (なめかわ・なおゆき) 27歳、麻衣の会社員時代の先輩で彼氏、麻衣を追いかけて……。

もらいたい」と頼まれたのだった。

以来、深山みやまの里の昼食処、霞庵かすみあんでの榎と次川との会食を終え、事務所兼社宅に戻った悠太は、この一週間、先輩の喜多嶋とともに亀田に伊予南フェアの準備を手伝ってもらいながら、その様子を観察していた。しかし亀田に不審な様子はまったく見当たらなかった。

「彼、石打くんたちの指示にちゃんと従いましたか？」

「はい、指示を出していたのは主に喜多嶋先輩でしたが、亀田さんはいつも指示通りにてきぱきと仕事してくれました」

「それは怪しいですね」

「怪しい？ 逆じゃないですか？」

「くだいようですが、拳動がおかしかったり情緒が不安定だったりするような印象はまったくありませんでしたか」

「まったくありませんでした」

「本当ですか？」

「本当です。亀田さんはいつも仕事に前向きで積極的でしたし、全体的に明るい感じでした」

「ますます怪しいですね」

新庄は眉根を寄せ、首をかしげたが、その目は何だか嬉しそうだ。

「やはり亀田の胸には何か一物がありそうだと見た方がいいようですね。私たちに土

下座して、ヴィンセント・ファンドの次川から「まちおこしを減茶苦茶にしてみましたどうですか」とそそのかされていたと告白してくれたのも、私たちが安心させる演技だったかもしれない

「あの……新庄さんの話がよく見えないんです。仕事に前向きで明るい感じなのって、決して悪いことじゃないですよね」

「それが亀田でなければね。私は亀田との付き合いはとも長いですが、彼は基本的に情緒不安定で、自己評価が低く、すぐに落ち込んだり愚痴を言ったり『どうせ僕なんか』と拗ねたりするタイプなんです。根

は決して悪い人間ではないと思いますがね。そんな亀田が仕事に前向きで明るい感じになつているのは、胸に何か一物ありと見るべきなんです。胸に秘めている良からぬ計

略が彼のモチベーションとなり、彼を前向きで明るい感じにさせているんですよ」

「本当ですか？」

「本当ですよ」

新庄は腕組みをしてしばらく考え込み、再び口を開いた。

「石打くん、もう一つ頼まれてほしいんですけどね。亀田を東京に連れて行ってくれませんか」

悠太は驚いてぼかんと口を開けた。

「あの……僕、今の話もよく見えないんで



す。新庄さんによれば亀田さんは良からぬ計略を胸に秘めているんですよね？　だから前向きなんですよね？　その亀田さんを東京に連れていくということは、危ない人を伊予南フェアの会場に連れていくということですよ。それってどう考えてもまずいんじゃないですか」

「まあ確かにリスクはあるんですがね……」

新庄は曖昧にうなずいた。

「ただ、これは僕の勘なんですけど、亀田はどうも石打さんの近くに置いておいた方がいい気がするんですよ」

「それって亀田さんを厄介払いしたいだけなんじゃないですか？」

「まあ……そうとも言えますがね」

新庄は薄笑いを浮かべた。

「それはそれとして石打くんたちはいつ東京へ発つんですか？」

「明日です。本当は今週初めに行かなければならなかったんですが、なかなか準備が終わらなくて」

西朱雀プロジェクトの四分地社長からの指示で、こちらでの伊予南フェアの準備を先週中に終え、今週、東京に発つ予定だったのだ。

「そういうことなら明日、亀田も一緒に連れて行ってあげてください。と言うか、実

はもう亀田に『東京に連れて行ってもらえ』と指示を出しちゃったんですよ」

新庄は悪びれもせずに言った。

喜多嶋が昼食を食べに外出したのを見届け、しばらく待って帰ってくる気配がないのを確認してから、亀田は事務所の作業机に置かれた伊予南フェア準備・運営マニュアルに手を伸ばした。

名女川は畳部屋にいますが、このところ昼夜が逆転して昼間は午後遅くまで寝ており、今も鼾が聞こえてくる。

亀田は伊予南フェア準備・運営マニュアルのページをめくった。十数ページの冊子で、大きめのA3の紙に伊予南フェアに必要な事前の準備や当日の運営手順がフローチャート図などを使って記されている。

亀田はスマホを出して、開催前一週間にすべきことが列挙されたページを写真に撮った。

勝負は開催の前々日だ。

このぎりぎりのタイミングで、伊予南フェアの生命線とも言える『つながり』を完全に断ち切ってやるのだ。

そうになったら石打も喜多嶋も大混乱に陥るだろう。開催も危ぶまれるに違いないし、何とか開催したところで失敗するのは目に見えている。

「ぐふふふ」

亀田は喉を鳴らした。大混乱に陥った石打や喜多嶋の様子を想像するだけで楽しく、可笑しくて、自然に笑いがこみあげてくる。こんなにワクワクするなんて人生で初めてではないだろうか？

事務所のガラス戸が開けられた音がした。亀田は思わずのけぞった。その拍子に伊予南フェア準備・運営マニュアルが作業机から落ちる。

喜多嶋が戻ってきたのではなかった。やってきたのは広岡だった。

「よう、元気でやっているみたいだな」

その仏頂面の口もとがかすかに歪んでいる。笑っているのだろうか？　それとも怒っているのか？　相変わらず表情が読み取れない。

「お前、昼飯食ったか？」

「いえ……」

「だったら一緒にどうだ？」

広岡は弁当が入った買い物袋を作業台に載せ、椅子を引いて腰かけた。

「俺の好みで海鮮丼だが、お前も嫌いじゃないだろう？」

「はあ……」

亀田は広岡の意図が分からず、身構えるような気持ちで向かいに腰掛けた。

「新庄に聞いたよ。明日、東京に発つんだ

ろう？　いよいよだな」

亀田はうなずき、発泡スチロールの井の蓋を開けた。マグロにイカ、ウニ、イクラが載っている。鮮魚はあまり好きではないが食べられないわけではない。

「それもあってお前に言っておきたいことがあるな」

広岡はさらに口を歪めた。どうやら笑っている……いや、笑おうとしているらしい。

「お前も知っている通り、あれ以来、俺はずっとお前と新庄を恨んできた。取り返しのつかないことをしやがってと思っきた」

亀田はうなずき「それは当然です」と小声で言った。

亀田は以前、広岡の別れた妻に「ここに住むのがどうしても嫌なら一時的に別居してもいいのではないか」と言い、それが別居への背中を押してしまったのだ。広岡が恨むのは無理もない。

「お前に言いたいのは、もう恨む気持ちはなくなっただけのことだ」

亀田は箸を止めて、広岡を見つめた。

「忘れたわけじゃない。忘れられることじやないからな。ただ最近……本当にごく最近になって、俺とあいつはそれぞれ別々の道歩く運命だったんだと自然に思えるようになったんだよ。あいつから手紙をも

らってね。『私は幸せになります。あなたも幸せになってください』と書いてあった。

それを読んで、俺はあいつの気持ちを慮ろうなどとこれっぽっちも考えていなかったことを悟ったよ。お前らが止めてくれて、あいつはいずれ出ていったと思う」

広岡はそれだけ言うとは急に黙り込み、弁当を食べ始めた。

亀田は沈黙に耐えられなくなり「そう思えるようになったのは良かったです」と言った。

「お前らを恨まないですむようになったのはな」

広岡は何度もうなずきながら言った。

その言い方に何だか含みがあるように亀田は思った。案の定、広岡は亀田を威圧するように見すえた。

「その代わりと言っては何だが、俺の頼みを聞いてくれないか？　伊予南フェアをきちんとやり遂げてほしいんだ。しっかり準備して、何一つトラブルが起きないように実行してくれ」

亀田は広岡の視線から目を逸らし「どういう意味ですか？」と聞いた。

「他意はないよ。言った通りの意味だ。要するに石打たちの力になってくれということだ」

「広岡さん、もしかして……僕を疑ってい

るんですか？」

「疑うだって？」

広岡は興味深げに亀田の顔を覗き込んだ。「どうしてそう思うんだ？　お前、何か後ろ暗いところもあるのか？」

「そうじゃありませんけれど」

「そうか、それを聞いて安心したよ。お前が良からぬことを考えているはずはないものな。とにかく、俺はお前が準備を怠ったリトラブルを起こしたりしないと心から信じているよ」

広岡は笑っているのだとはつきり示すように口を思いきり歪めた。

赤信号で停車したのを見計らったように悠太のケータイがまた鳴った。

「出たらどうですか？　さっきから引っこりなしにかかっていますよ」

出ようか出まいか迷う悠太に新庄がうんざりしたように言った。

悠太はラパンを路肩に寄せ、ポケットからケータイを出した。

麻衣からの電話だった。

「もう！　何度も電話かけさせないですよ！　悠太、いまだどこにいるの？」

「どこって……ええと……」

悠太は周囲を見回した。

「とにかくとっとと事務所兼社宅に戻って

きてくれない？ あたし、『パン焼き工房・まつしま』に行かなくちゃならないの。悠太に連れて行ってもらいたいのよ」

「事務所兼社宅って……麻衣、小海島にいるんじゃないかったの？」

「さっき戻って来たの。それよりも悠太、覚えてる？ あたしがつくったホームペーjジを見て、『パン焼き工房・まつしま』に来てみたいと連絡してくれた人がいると前に言ったでしょう？ それで実際に『パン焼き工房・まつしま』に来てくれて『ここでぜひパーティーを開きたい』と言ってくれたって、あたし、悠太に話したわよね。覚えてるでしょう？」

「覚えてるよ」

「本当？ じゃあ、その人、どんなパーティーを開きたいと言ったかしら？」

「ええと……歓送迎会だったっけ？」

「覚えていないじゃない！ 結婚披露宴よ。伊予南市を見下ろす庭でパーティーを開きたいと言ってくれたの。それでその人、七十歳を超えた人なの。大阪の大手電機メーカーに勤めていた人で、四十代で奥様を亡くされて以来ずっと一人だったんだって。それが趣味のサークルで婚約者と知り合い、ためらいもあつたけれど残りの人生を彼女と過ごそうと決断して結婚を決めたと言っ

のよ。あたし、この話も悠太にしたわよ。」

「悠太は床にひざまずき土下座した。」

「悠太、喜多嶋、亀田の三人は無言で新幹線の改札をくぐり、山手線のプラットホームに向かった。」



とてもロマンチックな話なんだから、忘れてよ！」

「そうだった。この話を麻衣に聞かされて、まちおこしの鍵を握るのは高齢者ではないかと思いついたのだった。」

「それでその人、堤誠一さんと言うんだけど、今、『パン焼き工房・まつしま』で松島さんと最終的な打ち合わせをしているの。それでね、あたし考えがあつて、堤さんに一つ提案させてもらっているのよ。今日、直接会ってそのダメ押しがしたいの。だからとつとこちに来てあたしを連れて行って！ 伊予南のまちおこしにとつても、絶対にいい話なんだから」

「麻衣は一方的にまくし立てて電話を切った。」

「麻衣は事務所兼社宅の冠木門の前で悠太の帰りを待っていて、ラパンを見つけないのり駆け寄ってきた。助手席に新庄がいるのを見て後部座席に乗り込み、「とつとと車出して！」と言った。」

「パン焼き工房・まつしまでは、オーナーシェフの松島秀人と七十歳前後の品の良い男性がレストランのテーブル席で談笑していた。」

「堤さん、遅くなってごめんなさい」

「麻衣は男性に深く頭を下げ、間髪入れず、

「それで堤さん、先ほど少しお電話で話した件ですけど、いかがですか？」

「と前のめりになって聞いた。」

「実は今、その話を松島さんとしていたところ……どうしたものかと」

「堤はたじろいだような迷い顔をした。」

「麻衣、何の話？」

「悠太が麻衣をつつく。」

「何を？」

「堤さんがここで結婚式を挙げる日は、ちょうど伊予南フェアの期間中なのよ」

「だから？」

「悠太はぼかんとした。」

「思いつかないの？ 悠太、伊予南フェアに来てくれた人に伊予南市の魅力を伝えて、訪れる人を増やしたいって言っていたじゃない。堤さんの結婚式の様子をネットで伊予南フェアの会場でも流すのよ。ここからの景色はきれいだし、きつと素敵な結婚式になるわ。それを見て、伊予南に行つてみたいと思う人はきつと増えるはずよ。中にはここで結婚式を挙げたいという人も出てくるかもしれない」

「悠太は目を見開いて麻衣を見つめた。なるほど、確かにそうかもしれない。」

「あの……堤さん、私、西朱雀プロジェクトという会社でまちおこし特命社員をして

「菓嶋から都営三田線に乗り換えて西菓嶋で降り、都電荒川線の庚申塚駅方面へとしばらく歩く。」

「雑居ビルのエレベーターを降り、西朱雀プロジェクトのドアを開けた悠太は口をあぐりと開けた。「うわ！」と喜多嶋も声を出す。」

「しばらく見えない間に事務所内の様子は一変していた。」

「会議室兼作業場として使っていた部屋には伊予南フェアのイメージ画を描いたポスターが

「ドが数十枚、壁に張られ、会議用テーブルの上には、畳一畳分はありそうな、西朱雀地蔵通り商店街の詳細なイラストマップが載っている。」

「伊予南フェアでは期間中、西朱雀地蔵通り商店街の店舗に伊予南市の特産品や名物を並べる。八百屋には伊予南市で取れる野菜や果物を、魚屋には魚貝類を、和菓子店や洋菓子店には新たに開発した和菓子、洋菓子を置いてもらう。飲食店にも伊予南市の食材を使った特別メニューを出してもらう。さらに期間中、このオフィスを開放して、伊予南市の魅力を伝えるパネル展を開く。一言で言えば、西朱雀地蔵通り商店街全体を伊予南市の色で染め上げるのだ。」

「長旅、ご苦労だったな」

「社長の四分地が立ち上がり、三人を出迎えた。」

「疲れているところ悪いが、すぐに始めよう。どこにでも腰かけてくれ」

「四分地はそう言って会議用のパイプ椅子に座った。」

「かえでもやって来た」

「準備はいよいよ正念場よ。開催までの段取りを説明するから、三人ともさっさと座って」

「かえでがホワイトボードの前に立った。」

Kazubiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト

大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜市生まれ。

日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、

『日経ビジネス』発行人などを務めた後、

2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー

『錆色 (さびいろ)の警鐘』(中央公論社)で作家デビュー。

TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。